

---

# 現代風土記・桃太郎伝説

天井海老抜き

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現代風土記・桃太郎伝説

### 【Nコード】

N2054L

### 【作者名】

天井海老抜き

### 【あらすじ】

古代から伝わる伝説には何らかの因縁がある。その因縁は現代になっても未だ終わっていない。彼らが現れたのもその因縁の所為だろう。

吉備津神社の夜 (1) (前書き)

稚拙な文章なので読みづらいかもしれません。  
パソコンで文章を書くのも初めてなので…。

## 吉備津神社の夜 (1)

一〇(癸巳前八八) 九月甲午・九月丙戌朔甲午。  
吉備津彦遣西道。

『日本書紀より』

一品聖靈吉備津宮、新宮本宮内の宮、隼人崎、北や南の神客人、良御崎は恐ろしや

『梁塵秘抄より』

桃太郎さん。桃太郎さん。お腰につけた黍団子。一つわたしにくださいな。

『童謡桃太郎より』

岡山県岡山市。

中国地方では広島市に次ぐ人口を持つ政令指定都市で、名前通り同県の県庁所在地である。

律令制時代は備前国と呼ばれ、備前長船や吉岡十文字など幾つもの優れた刀工を輩出している。江戸時代に入ると岡山藩になり、明治になるまで池田氏が統治していた。廃藩置県後に岡山県の県庁所在地になり、今に続いている。

この都市は瀬戸内海式気候の影響で、全国的に見ても降水量が非常に少ない。『晴れの国』と言う市のキャッチフレーズもここから来ている。

その岡山市の北区に、吉備津神社と言う歴史的な神社がある。

大和朝廷が地方平定の為に派遣した四道將軍の一人、大吉備津彦命を祀っている。岡山がまだ吉備国の一部だった時代では、吉備国の総鎮守でもあった。吉備国が分割された後は、備前国・備中国・備後国の一宮となり、各地で信仰を集めている。

その吉備津神社にある日、一人の奇妙な男が足を運んだ。

明るいオレンジのベストに紫と黒のTシャツを着て、黒色のカーゴパンツを穿き、迷彩柄の帽子を被っている。足には靴にも見える変なサンダルを履いていた。顔色は青白く人間の死体のそれとあまり変わらない。

男は本殿を訪れても参拝はせず、境内の中をずっとフラフラと歩き回っていた。他の参拝客はその男と目が会つと必ず自分から視線を逸らした。その目は、まるでカミナリのようにキラキラと輝いていて非常に不気味だった。

「君はそこで何をやっているのですか？」

境内をうろつき回るその異様な男に、堪りかねた神社のスタッフが声をかけた。男がキラキラとした目をスタッフに向ける。それだけでも十分に威圧感があった。

「……………」

男は何も答えない。ただキラキラと光る目でスタッフを睨んでいる。スタッフはあまりの怖さに胸が張り裂けそうだった。暴力の怖さとは別の、ホラーとしての怖さがそこにあった。

「知り合いを待つてるんだよ」

不意に男が喋りだした。その声は以外にも普通である。

「そ、その御知り合いはいつ頃に来られるのですか？」

「……………」

その質問に男がまた黙る。そして右手で顎をしゃくりだす。

何かを言いたいらしいのだが、それを言葉に表現できないらしく首を捻っているようだ。

「後で来るとは思っただけどなあ」

暫くひまの沈黙の末に男がそう言った。どうやら知り合いはまだ来ないらしい。

「あの……非常に申し訳ないのですが、ここは神社なので待ち合わせ

せは遠慮してもらいたいのですが」

ここは神社である。飽くまでも宗教法人の私有地で、公共の場という訳では無い。そこで違反した行為をする事は法律で禁じられている。個人同士の待ち合わせが法律に違反していると言う訳ではないが、その行いによって神社側に迷惑が掛けるとなれば、到底許される行為では無い。この男がしている行為もそれに匹敵する。

「ふーん、そうなの」

男の忌々しそうな声が響く。その声に呼応するかのように、彼の目玉が更にギラギラと輝き始めた。その目の迫力は半端ではなく、嘗て日本中にブームを引き起こしたホラー映画の、テレビから出て来る女の悪霊とも張り合えるレベルである。

それは、ホラーに耐性の無いスタッフには耐えられない光景だった。「っ！」

この男は余りにも恐すぎる。ここまで来るともう同じ人間とは思えない。

「っ、次からは気を付けてくださいね！」

目の恐怖に耐えきれず、スタッフは急いで社務所へと逃げ出す。社務所へ逃げ込む最後まで、彼の背中では二つの目玉がギラギラと光り続けていた。それは余りにも異様な光景だった。

境内からスタッフが居なくなると、周りの参拝客も逃げるように男の傍から離れ始めていく。

「……何で逃げるのよ」

完全に孤立した場所で、男はそう小さく呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2054/>

---

現代風土記・桃太郎伝説

2010年10月9日07時04分発行